

# 出所受刑者の生活問題と社会復帰支援の課題

駒澤大学 文学部社会学科教授 桐原宏行

## (要約)

本研究は、社会内処遇段階にあり、複合的な社会復帰上の問題を抱えている更生保護施設利用者への面接調査を通して、8カテゴリー（「人間関係」「ソーシャルサポート」「日常生活」「生活習慣等」「性格・行動」「不安感」「不満感」「職業」）の生活問題について、一般者との差異及び出所を契機とした個人内変化の2つの側面から検討を加えた。結果から、対人関係の希薄化・縮小化による孤立傾向、ソーシャルサポート全般の不十分さ・直接的サポートの縮小化、経済活動の不活発さ、ストレスを軽減する機会の減少、収入と住居への強い不安感、職場不適応や離職が発生しやすい状況、等が重点的支援課題として明らかになった。これらの生活問題への対応においては、適切なアセスメントに基づく個別的に計画化された柔軟なケースワークの必要性、専門的・非専門的ソーシャルサポートの確保と連携、雇用の場の確保と雇用の質的向上に向けた職場定着支援等が不可欠となる。

キーワード：出所受刑者、生活問題、社会復帰支援

## 1 問題と目的

2013年(度)矯正統計年報によると、受刑者26,535人が出所し、新たに22,755人が入所している。新受刑者に占める入所度数2度以上の再入者率は13,407人(58.9%)と非常に高い割合となっている。また、平成20年の出所受刑者の出所後6年以内の累積再入率は42.3%であり、出所後短期間に再入所する傾向にある<sup>5)</sup>。再犯の背景には、犯罪に至る以前からその多くが就労、住居、対人関係、経済的困難、薬物、飲酒等日常生活で多様な問題を抱えており、出所後の社会復帰において、住居、雇用の確保、周囲の理解と受け入れ、相談支援、経済的支援などの支援の必要性が指摘されて

いる(平成24年版犯罪白書)<sup>7)</sup>。犯罪対策閣僚会議において策定された「再犯防止に向けた総合対策」(平成24年)でも、刑務所出所者が再犯に至る要因を多面的に分析し、各施策の効果検証を踏まえた早急の対応を行うことが喫緊の課題とされている<sup>4)</sup>。

このように出所受刑者の再犯防止と改善更生は刑事政策における重要課題であり、現在そのための社会内処遇がハード・ソフト両面で推進されている。社会的マイノリティである出所受刑者の地域社会への再統合に向けた支援は、社会の構成員としての諸権利の回復や社会活動への主体的参画を目標とするソーシャルインクルージョンの実現、さらには、

それを実現していく社会システムの再構築などにおいても意義深い。なかでも、生活基盤が弱く、社会生活への適応に問題を抱えている出所受刑者への支援は、再犯を抑制するためにもきわめて重要であり、生活問題の実態を踏まえた対応が求められよう。

そこで、本研究は、社会内処遇段階にあり、多様な社会復帰上の問題を抱えている更生保護施設利用者<sup>1</sup>の生活問題について、一般生活者との差異及び出所を契機とした変化の視点から明らかにし、それを踏まえた支援課題を検討することを目的とした。

## 2 方法

### (1)調査対象

調査への協力に同意の得られた20歳以上65歳未満の一般成人(以下「一般者」とする)72人(平均年齢46.3歳(SD 11.0))及び更生保護施設を利用している出所受刑者71人(平均年齢45.2歳(SD 11.1)),合計143人を対象とした。なお、2群間の平均年齢に有意差は認められなかった( $t=0.60$ ,  $df=141$ , N.S.)。

### (2)調査時期

2013年8月～2014年3月

### (3)調査項目

調査項目は、「受刑者・在院者の社会復帰上の課題」(平成24年版犯罪白書)での調査結果<sup>2</sup>をもとに、「人間関係項目(5項目)」「ソーシャルサポート<sup>3</sup>項目(5項目)」「日常生活項目(13項目)」「生活習慣等項目(6項目)」「性格・行動等項目(22項目)」「不安感項目(10項目)」「不満感項目(8項目)」「職業関連項目(17項目)」<sup>5</sup>の8カテゴリー、合計86項目で構成した。

### (4)調査手続き

調査は、まず被調査者に対して調査目的の説明を行い、調査への協力の同意が得られた場合のみ実施した。結果は統計処理するため、プライバシーは完全に保護されることを説明し、可能な限り社会的望ましさへの回答の偏りを排除するよう配慮した。

一般者への調査は、留置法により実施した。回答期間は2週間を設定し、後日回収した(回

- 1 刑務所仮釈放者又は満期出所受刑者、刑の執行猶予の言い渡しを受けた者などのうち、家族や公的機関などからの援助を受けられない者、居住の場や就職先の確保が困難な者、社会生活上の問題がある者など。
- 2 「保護司及び受刑者・少年院在院者に対する意識調査(平成24年版犯罪白書第3章)の結果から、受刑者は犯罪に至る以前から、その多くが就労、住居、対人関係、経済的困難、薬物、飲酒等の多様な問題を抱えていることが指摘されており、この問題点を踏まえて調査カテゴリーを構成した。
- 3 ソーシャルサポートは、インフォーマルサポート(非専門職によって提供される支援)とフォーマルサポート(専門職によって提供される支援)の総体を意味しており、その内容は信頼や共感、見守りのような情緒的サポート、問題解決に向けた助言や提案などの情動的サポート、物や金銭の提供および具体的な援助活動などの道具的サポートなどに区別される。
- 4 自己受容の個人差を測定する尺度である「自己受容測定尺度(沢崎, 1993)」の「精神的自己項目:B」を参考に項目を作成した。
- 5 「職場環境、職務内容、給与に関する職務満足尺度(安達, 1998)」の項目を参考に項目を作成した。この尺度はハーズバーグの2要因理論(岡村, 2013)に依拠しており、2要因とは、仕事上で不満を引き起こす要因である「衛生要因」(会社の政策と管理、監督者との関係、作業条件、賃金、職場の人間関係等)と仕事に満足を感じるときの要因である「動機づけ要因」(仕事の達成、成果の承認、仕事の内容、仕事の責任、昇進、成長等)である。衛生要因が満たされることで仕事上の不満は防止できるが、仕事にやりがいを持って個性を発揮し、豊かな職業生活を送るためには、衛生要因の充足を基礎として、動機づけ要因が充足されることが重要であるとされている。なお、職業関連項目では、①～⑧を動機づけ要因項目、⑨～⑰を衛生要因項目とした。

収率65.5%)。一方、出所受刑者への調査は、個室での対面環境において、被調査者がリッカート尺度(5件法)による回答用プレートを用いて調査者からの各項目の質問に対して回答し、その回答内容を調査者が調査票に記入していく構造化面接法で実施した<sup>6</sup>。また、回答内容はデータ処理の際に確認した後に消去することを条件に被調査者の承諾の上、録音した。なお、調査時間は40分～50分程度であった。

### 3 結果と考察

#### (1)一般者との比較結果

調査のカテゴリーとした、「人間関係」「ソーシャルサポート」「日常生活」「生活習慣等」「性格・行動等」「不安感」「不満感」「職業関連」の8カテゴリーの各質問項目に対する現在の状況

について、一般者群、出所受刑者群(表中「出所者群」とした)の回答の平均値及びその比較結果を表1から表8に示す。

人間関係項目は、「かなり悪い(1点)」～「かなり良い(5点)」で回答を求めた。表1によると、すべての項目で両群間に有意差が認められた。出所受刑者群は一般者群と比較して、自分との関係の違いにかかわらず対人関係を否定的に捉えていた。

ソーシャルサポート項目は、「全くいない(1点)」～「かなりいる(5点)」で回答を求めた。表2によると、全項目で有意差が認められた。出所受刑者群は、一般者群と比較して、信頼、共感でき、直接的支援が得られる人の存在が少ないと感じていた。人間関係項目での結果を踏まえると、対人関係が悪いと感じている上に、生活場面で実際に支えてくれる人の存

表1 人間関係項目における回答結果(群間比較)

項目	一般者群	出所者群	t値
① 家族(親・兄弟)との人間関係	4.13	2.54	9.73 ***
② 親せきとの人間関係	3.63	2.54	7.08 ***
③ 友人との人間関係	4.10	3.30	5.93 ***
④ 職場での人間関係	3.82	3.53	2.29 *
⑤ 地域(近所)での人間関係	3.46	3.01	3.80 ***

\*\*\* p<.001 \* p<.05

表2 ソーシャルサポート項目における回答結果(群間比較)

項目	一般者群	出所者群	t値
① 信頼できる(気持ちを通じ合う)人の存在	3.67	3.11	3.75 ***
② よく話を聞いてくれる(いつでも話ができる)人の存在	3.61	3.18	2.77 **
③ 経済的支援をしてくれる人の存在	2.82	2.20	3.39 **
④ 病気などで寝込んだ時等に身の回りの世話をしてくれる人の存在	3.49	2.39	6.38 ***
⑤ 困った時に一緒に行動して助けてくれる人の存在	3.40	2.82	3.76 ***

\*\*\* p<.001 \*\* p<.01

6 調査は社会福祉士としての専門資格を有し、現在、出所受刑者支援の職務等に従事している専門実務者が担当した。

在も一般者に比べて少ない状況にある。

日常生活項目は、「全くない(1点)」～「非常によくある(5点)」で回答を求めた。表3によると、「他人に暴力をふるうこと」「買い物に行くこと」「ボランティアをすること」を除く項目で有意差が認められた。出所受刑者群は一般者群と比較して、日常生活の中で周囲との会話量が少なく、孤立しがちで、余暇を楽しむ機会が少ないと感じていた。人と関わる機会の少なさは、社会での活動量と範囲を縮小させ、より孤立状況を悪化させることに

もなりうる。

生活習慣等項目は、「少ない(1点)」～「多い(5点)」で回答を求めた。表4によると、「喫煙量」「睡眠時間」を除く項目で有意差が認められた。出所受刑者群は一般者群と比較して、経済活動が活発ではなく、食事量や飲酒量も少ないと感じていた。経済活動の不活発さは、職業生活再開の過程にあり、生活資金が十分に得られていない状況を反映するものであろう。また、食事や飲酒は刑務所での食習慣が維持されているものと思われる。

表3 日常生活項目における回答結果(群間比較)

項 目	一般者群	出所者群	t 値
① 目上の人との会話	4.01	3.54	2.88 **
② 同僚との会話	4.15	3.23	5.40 ***
③ 近所の人との会話	2.67	1.83	5.49 ***
④ 他人と言い争うこと ※	2.08	1.57	4.27 ***
⑤ 他人に暴力をふるうこと ※	1.21	1.10	1.63 N.S.
⑥ ひとりであること ※	2.79	3.21	2.38 *
⑦ 友人と一緒にいること	3.07	2.56	3.15 **
⑧ 買い物に行くこと	3.57	3.44	0.86 N.S.
⑨ 家でくつろぐこと	3.82	3.17	3.73 ***
⑩ ボランティアをすること	1.72	1.51	1.42 N.S.
⑪ レジャーを楽しむこと	3.25	1.77	8.69 ***
⑫ ギャンブルをすること ※	1.92	1.48	2.59 *
⑬ スポーツをすること	3.06	1.90	5.79 ***

\*\*\* p<.001 \*\* p<.01 \* p<.05 N.S. Non-Significant

※ 逆転項目

表4 生活習慣等項目における回答結果(群間比較)

項 目	一般者群	出所者群	t 値
① 食事量	3.50	3.03	3.11 **
② 飲酒量 ※	3.04	1.30	10.09 ***
③ 喫煙量 ※	2.83	2.85	0.53 N.S.
④ 睡眠時間	2.83	3.13	1.81 N.S.
⑤ 収入	2.97	1.77	7.96 ***
⑥ 支出	3.31	2.27	6.22 ***

\*\*\* p<.001 \*\* p<.01 N.S. Non-Significant

※ 逆転項目

性格・行動等項目は、「そうではない(1点)」～「そうである(5点)」で回答を求めた。表5によると、出所受刑者群は「物事をプラス思考で考える」「責任感が強い」「意志が強い」「自信がある」「生活にハリがある」「幸せである」「不幸である」の項目で一般者群と比較して、否定的に捉えていた。

不安感項目は、「全くない(1点)」～「非常によくある(5点)」で回答を求めた。表6によると「家族等身近な人との人間関係の不安」「周囲からの見られ方への不安」「収入につい

ての不安」「住居についての不安」「罪を犯すことについての不安」「理由もなく不安」の項目で有意差が認められた。出所受刑者群は一般者群と比較して、身近な人との人間関係や社会からの偏見、収入、住居、再犯についての不安を強く感じていた。また、不安材料が重複して原因が特定できない不安感を強く抱えている点も特徴的である。「不安感」は予期的な心の状態であり、心配や恐怖などの感情である。出所後の不安定な時期に身近な家族等との接触が制約されたなかで、新たな人間

表5 性格・行動等項目における回答結果(群間比較)

項目	一般者群	出所者群	t値
① 積極的に物事に取り組む	3.49	3.41	0.47 N.S.
② 物事をプラス思考で考える	3.63	3.18	2.45 *
③ 忍耐(粘り)強い	3.64	3.41	1.47 N.S.
④ 新たなことに挑戦する	3.33	3.35	0.10 N.S.
⑤ 明るい	3.85	3.70	0.98 N.S.
⑥ 社交的である	3.59	3.41	1.06 N.S.
⑦ おだやかである	3.68	3.94	1.91 N.S.
⑧ 落ち着いている	3.63	3.65	0.15 N.S.
⑨ 素直である	3.71	3.66	0.32 N.S.
⑩ 相手の立場を考える	3.99	3.86	1.01 N.S.
⑪ 協調性がある	3.90	3.80	0.68 N.S.
⑫ 責任感が強い	4.08	3.55	3.57 ***
⑬ 約束を守る	4.19	4.06	1.05 N.S.
⑭ 努力をする	3.82	3.68	0.93 N.S.
⑮ 意志が強い	3.68	3.17	3.03 **
⑯ 礼儀正しい	3.76	3.93	1.30 N.S.
⑰ 自信がある	3.43	2.96	2.83 **
⑱ 生活にハリがある	3.38	2.86	2.92 **
⑲ 生活にリズムがある	3.56	3.32	1.27 N.S.
⑳ 幸せである	4.06	2.74	8.15 ***
㉑ 不幸である ※	1.63	2.52	5.55 ***
㉒ 体調がよい	3.65	3.79	0.75 N.S.

\*\*\*p<.001 \*\*p<.01 \*p<.05 N.S. Non-Significant

※ 逆転項目

関係を築いていくことを余儀なくされ、社会生活、経済生活に移行しなければならない状況に直面している心理状態を反映しているといえよう。不安が不適応行動を誘発し、再犯に向かうという負のサイクルに留意すべきである。

不満感項目は、「全くない(1点)」～「非常によくある(5点)」で回答を求めた。表7によると「家族以外の人との人間関係の不满」「職場での人間関係の不满」「仕事についての不满」については、一般者群の不満感が有意に強く、出所受刑者群では、「住居」についてのみ不満を強く感じていた。「不満感」は対象へ

の不快な心の状態であり、生活の中で発生している現実的かつ特定化された問題である。

職業関連項目は、「そう思わない(1点)」～「そう思う(5点)」で回答を求めた。表8によると、出所受刑者群は「自分は会社に必要とされている」「自分の意見が職場で取り上げられる」「自分は会社に貢献している」などの動機づけ要因項目、「生活に困らない給料はもらっている」「自分の仕事で人生の見通しが立つ」「知力を必要とする仕事である」「コミュニケーション力を必要とする仕事である」などの衛生要因項目の両方で一般者群と比較して否定的に捉えていた。

表6 不安感項目における回答結果(群間比較)

項目	一般者群	出所者群	t値
① 家族等身近な人との人間関係の不安	2.00	2.67	3.66 ***
② 家族以外の人との人間関係の不安	2.26	2.41	0.83 N.S.
③ 周囲からの見られ方への不安	2.24	2.83	2.97 **
④ 職場での人間関係の不安	2.35	2.32	0.18 N.S.
⑤ 仕事についての不安	2.86	3.03	0.84 N.S.
⑥ 収入についての不安	2.99	3.48	2.50 *
⑦ 住居についての不安	2.26	3.48	5.77 ***
⑧ 健康についての不安	2.76	2.55	1.16 N.S.
⑨ 罪を犯すことについての不安	1.56	2.49	4.62 ***
⑩ 理由もなく不安	1.54	2.38	4.57 ***

\*\*\* p<.001 \*\* p<.01 \* p<.05 N.S. Non-Significant

表7 不満感項目における回答結果(群間比較)

項目	一般者群	出所者群	t値
① 家族等身近な人との人間関係の不满	2.00	2.10	0.56 N.S.
② 家族以外の人との人間関係の不满	2.33	2.00	2.16 *
③ 周囲からの見られ方への不满	2.07	2.04	0.17 N.S.
④ 職場での人間関係の不满	2.47	1.94	3.33 **
⑤ 仕事についての不满	2.88	2.21	3.33 **
⑥ 収入についての不满	2.92	2.67	1.16 N.S.
⑦ 住居についての不满	2.22	2.65	2.06 *
⑧ 理由もなく不满	1.46	1.61	1.12 N.S.

\*\* p<.01 \* p<.05 N.S. Non-Significant

表8 職業関連項目における回答結果(群間比較)

項 目	一般者群	出所者群	t 値
① 自分の仕事が好きである	3.58	3.23	1.64 N.S.
② 自分の仕事を誇らしいと思う	3.44	3.33	0.58 N.S.
③ 自分の仕事を通して成長できる	3.63	3.42	1.00 N.S.
④ 自分の仕事は自分に合っている	3.57	3.31	1.37 N.S.
⑤ 自分の仕事にやり甲斐がある	3.58	3.39	0.97 N.S.
⑥ 自分は会社に必要とされている	3.71	3.28	2.38 *
⑦ 自分の意見が職場で取り上げられる	3.73	2.78	4.90 ***
⑧ 自分は会社に貢献している	3.82	2.98	4.83 ***
⑨ 職場の人間関係がよい	3.68	3.44	1.31 N.S.
⑩ 労働時間は適当である	3.33	3.30	0.17 N.S.
⑪ 休憩時間はくつろげる	3.29	3.21	0.38 N.S.
⑫ 生活に困らない給料はもらっている	3.60	2.78	3.92 ***
⑬ 自分の仕事で人生の見通しが立つ	3.31	2.63	3.16 **
⑭ 体力を必要とする仕事である	3.33	3.69	1.64 N.S.
⑮ 知力を必要とする仕事である	3.86	3.31	2.60 *
⑯ コミュニケーション力を必要とする仕事である	4.35	3.58	4.18 ***
⑰ 忍耐力を必要とする仕事である	4.08	3.95	0.75 N.S.

\*\*\* p<.001 \*\* p<.01 \* p<.05 N.S. Non-Significant

## (2)出所後の変化

各カテゴリーの質問項目に対する、刑務所入所前(再犯者においては直近の刑務所入所前)と現在の状態について、回答の平均値及びその比較結果を表9から表16に示す。

人間関係項目への回答結果(表9)によると、刑務所入所前と比較して、「職場での人間関係」以外の項目で有意差が認められており、入所前と比較して対人関係を否定的に捉えていた。

ソーシャルサポート項目への回答結果(表10)によると、「経済的支援をしてくれる人の存在」「病気などで寝込んだ時等に身の回りの世話をしてくれる人の存在」で有意差が認められた。出所を契機に直接的支援者が少なくなっている。

日常生活項目への回答結果(表11)によると、「ひとりであること」「ボランティアをす

ること」を除く項目で有意差が認められた。出所後、周囲の人と直接的に関わる機会が縮小化している。さらに、表12の生活習慣等の変化の回答結果と併せてみると、出所後の収入の減少が経済活動を不活性化させ、消費をともなう余暇活動が制約され、「睡眠時間」が有意に増加する傾向にある。人との関わりが少なく、余暇も楽しめない状況は、ストレスの蓄積に直結するものであろう。

性格・行動等項目(表13)への回答結果によると、「おだやかである」「落ち着いている」「相手の立場を考える」「協調性がある」「努力をする」「意志が強い」の項目で出所を契機に肯定的に捉えることができるようになっていた。これらは、社会生活への適応に必要な知識や態度を習得することを目的として実施されている受刑期間中の一般改善指導や保護観

表9 人間関係項目における回答結果(群内比較)

項 目	入所前	現在	t 値
① 家族(親・兄弟)との人間関係	3.01	2.54	2.87 **
② 親せきとの人間関係	2.93	2.54	2.99 **
③ 友人との人間関係	3.65	3.30	2.61*
④ 職場での人間関係	3.73	3.53	1.42 N.S.
⑤ 地域(近所)での人間関係	3.24	3.01	2.25 *

\*\* p&lt;.01 \* p&lt;.05 N.S. Non-Significant

表10 ソーシャルサポート項目における回答結果(群内比較)

項 目	入所前	現在	t 値
① 信頼できる(気持ちが通じ合う)人の存在	3.10	3.11	1.00 N.S.
② よく話を聞いてくれる(いつでも話ができる)人の存在	3.25	3.18	0.46 N.S.
③ 経済的支援をしてくれる人の存在	2.56	2.20	2.11 *
④ 病気などで寝込んだ時等に身の回りの世話をしてくれる人の存在	3.07	2.39	3.73 ***
⑤ 困った時に一緒に行動して助けてくれる人の存在	3.07	2.82	1.62 N.S.

\*\*\* p&lt;.001 \* p&lt;.05 N.S. Non-Significant

表11 日常生活項目における回答結果(群内比較)

項 目	入所前	現在	t 値
① 目上の人との会話	3.99	3.54	3.40 **
② 同僚との会話	3.84	3.23	4.08 ***
③ 近所の人との会話	2.60	1.83	5.77 ***
④ 他人と言い争うこと ※	2.37	1.57	6.41 ***
⑤ 他人に暴力をふるうこと ※	1.47	1.10	4.06 ***
⑥ ひとりでいること ※	3.44	3.21	1.44 N.S.
⑦ 友人と一緒にいること	3.57	2.56	5.94 ***
⑧ 買い物に行くこと	3.96	3.44	3.92 ***
⑨ 家でくつろぐこと	3.66	3.17	2.52 *
⑩ ボランティアをすること	1.67	1.51	1.16 N.S.
⑪ レジャーを楽しむこと	3.41	1.77	9.20 ***
⑫ ギャンブルをすること ※	2.85	1.48	7.42 ***
⑬ スポーツをすること	3.06	1.90	6.50 ***

\*\*\* p&lt;.001 \*\* p&lt;.01 \* p&lt;.05 N.S. Non-Significant

※ 逆転項目

表12 生活習慣等項目における回答結果(群内比較)

項 目	入所前	現在	t 値
① 食事量	3.30	3.03	1.35 N.S.
② 飲酒量 ※	3.15	1.30	10.06 ***
③ 喫煙量 ※	3.62	2.85	4.45 ***
④ 睡眠時間	2.48	3.13	4.00 ***
⑤ 収入	3.34	1.77	9.26 ***
⑥ 支出	3.94	2.27	9.07 ***

\*\*\* p&lt;.001 N.S. Non-Significant

※ 逆転項目

察における指導監督等の効果ともいえるのではなかろうか。一方、「自信がある」「生活にハリがある」「幸せである」の項目については、入所前と比較して否定的に感じていた。性格・行動面では、出所後の不安定な生活状況を反映している一方で、社会復帰に向けたポジティブな面も認められており、いかにそれをネガティブなものにさせないようにするかが重要となるであろう。

不安感項目(表14)への回答結果によると、「仕事についての不安」「収入についての不安」「住居についての不安」「健康についての不安」で有意差が認められた。これらの事項は、生

活の立て直しのために不可欠なものである。出所後の不安は、曖昧なものではなく、現在直面している問題への心理状態を反映したものであるといえよう。

不満感項目への回答結果(表15)によると、「家族等身近な人との人間関係の不満」「周囲からの見られ方への不満」「職場での人間関係の不満」では、現在の方が有意に不満感が軽減していた。現在は「住居についての不満」のみ有意に不満感が強い。対人関係での不満が軽減している点については、出所後の対人関係の量と範囲を踏まえると、不満感を感じるほど接触機会がないことも考えられる。

表13 性格・行動等項目における回答結果(群内比較)

項目	入所前	現在	t値
① 積極的に物事に取り組む	3.48	3.41	0.42 N.S.
② 物事をプラス思考で考える	3.30	3.18	0.89 N.S.
③ 忍耐(粘り)強い	3.15	3.41	1.98 N.S.
④ 新たなことに挑戦する	3.28	3.35	0.42 N.S.
⑤ 明るい	3.74	3.70	0.45 N.S.
⑥ 社交的である	3.53	3.41	1.00 N.S.
⑦ おだやかである	3.67	3.94	2.14 *
⑧ 落ち着いている	3.32	3.65	2.78 **
⑨ 素直である	3.51	3.66	1.59 N.S.
⑩ 相手の立場を考える	3.61	3.86	2.32 *
⑪ 協調性がある	3.61	3.80	2.02 *
⑫ 責任感が強い	3.44	3.55	1.02 N.S.
⑬ 約束を守る	4.00	4.06	0.46 N.S.
⑭ 努力をする	3.37	3.68	2.17 *
⑮ 意志が強い	2.82	3.17	3.05 **
⑯ 礼儀正しい	3.76	3.93	1.65 N.S.
⑰ 自信がある	3.20	2.96	2.00 *
⑱ 生活にハリがある	3.32	2.86	2.31 *
⑲ 生活にリズムがある	3.06	3.32	1.18 N.S.
⑳ 幸せである	3.29	2.74	2.62 *
㉑ 不幸である ※	2.39	2.53	0.93 N.S.
㉒ 体調がよい	3.80	3.79	0.09 N.S.

\*\* p<.01 \* p<.05 N.S. Non-Significant

※ 逆転項目

表14 不安感項目における回答結果(群内比較)

項目	入所前	現在	t値
① 家族等身近な人との人間関係の不安	2.70	2.67	0.19 N.S
② 家族以外の人との人間関係の不安	2.42	2.41	0.12 N.S
③ 周囲からの見られ方への不安	2.82	2.83	0.11 N.S
④ 職場での人間関係の不安	2.32	2.32	0.00 N.S
⑤ 仕事についての不安	2.51	3.03	2.71 **
⑥ 収入についての不安	2.77	3.48	4.16 ***
⑦ 住居についての不安	2.21	3.48	5.92 ***
⑧ 健康についての不安	2.18	2.55	2.63 *
⑨ 罪を犯すことについての不安	2.79	2.49	1.40 N.S
⑩ 理由もなく不安	2.27	2.38	0.72 N.S

\*\*\* p<.001 \*\* p<.01 \* p<.05 N.S. Non-Significant

表15 不満感項目における回答結果(群内比較)

項目	入所前	現在	t値
① 家族等身近な人との人間関係の不満	2.51	2.10	2.86 **
② 家族以外の人との人間関係の不満	2.23	2.00	1.77 N.S
③ 周囲からの見られ方への不満	2.30	2.04	2.09 *
④ 職場での人間関係の不満	2.37	1.94	2.96 **
⑤ 仕事についての不満	2.40	2.21	1.10 N.S
⑥ 収入についての不満	2.55	2.67	0.61 N.S
⑦ 住居についての不満	2.00	2.65	3.52 **
⑧ 理由もなく不満	1.73	1.61	1.20 N.S

\*\* p<.01 \* p<.05 N.S. Non-Significant

表16 職業関連項目における回答結果(群内比較)

項目	入所前	現在	t値
① 自分の仕事が好きである	3.97	3.23	3.75 ***
② 自分の仕事を誇らしいと思う	3.86	3.33	2.68 **
③ 自分の仕事を通して成長できる	3.88	3.42	2.38 *
④ 自分の仕事は自分に合っている	4.02	3.31	3.93 ***
⑤ 自分の仕事にやり甲斐がある	4.11	3.39	3.93 ***
⑥ 自分は会社に必要とされている	3.72	3.28	2.45 *
⑦ 自分の意見が職場で取り上げられる	3.78	2.78	4.91 ***
⑧ 自分は会社に貢献している	3.78	2.98	4.68 ***
⑨ 職場の人間関係がよい	3.89	3.44	2.23 *
⑩ 労働時間は適当である	3.50	3.30	1.12 N.S
⑪ 休憩時間はくつろげる	3.60	3.21	1.83 N.S
⑫ 生活に困らない給料はもらっている	3.89	2.78	5.03 ***
⑬ 自分の仕事で人生の見通しが立つ	3.48	2.63	3.63 **
⑭ 体力を必要とする仕事である	3.83	3.69	0.77 N.S
⑮ 知力を必要とする仕事である	4.02	3.31	3.96 ***
⑯ ミニケーション力を必要とする仕事である	4.30	3.58	3.99 ***
⑰ 忍耐力を必要とする仕事である	4.19	3.95	1.48 N.S

\*\*\* p<.001 \*\* p<.01 \* p<.05 N.S. Non-Significant

職業関連項目(表16)への回答結果によると、「労働時間は適当である」「休憩時間はくつろげる」「体力を必要とする仕事である」「忍耐力を必要とする仕事である」以外の項目で有意差が認められた。出所を契機に動機づけ要因項目のすべて及び衛生要因項目で状況が悪化している。出所直後の職業生活再開の段階にあり、就労環境に慣れることに精一杯で、意欲を持って仕事に臨めるような状況にはないことがうかがえる。

#### 4 まとめと今後の課題

調査から、生活問題を抱えている出所受刑者が再び生活者として社会生活を送っていく上で着目すべき点として、一般者との比較による相対的問題点と出所を契機として変化した絶対的問題点をそれぞれ明らかにした。この2つの視点での分析において共通する問題点は、社会での生活者としての適応を阻害する問題である上に、出所後個人内で悪化してきているものである。以下にそれらの問題を整理し、支援課題に関して述べる。

「人間関係」では、家族や親せき、友人、近所の住民など自分との関係の違いにかかわらず良好ではない状況にある。それを裏付けるように日常生活での周囲との関わりが希薄で孤立傾向が強い。人間関係については、主体的に人と関わる頻度が増加し、孤立状況を回避できるかが課題となる。余暇のための消費活動が制約されている現状を考えると、出費を伴わずに対人接触を増加させ、生活に変化を持たせる社会的活動が必要となる。そこで着目されるのがボランティア活動である。ボランティア活動等の向社会的活動はそもそも経験

が乏しいが、その分内容や取り組み方次第では、自己肯定感や自己有用感、連帯感を向上させる効果も期待できる可能性がある。出所後の性格・行動の変化として、向社会的側面での自己評価の高まりが認められている点も活動を開始するよいタイミングであると思われる。ただし、ボランティア活動は、不安定かつ精神的に余裕のない出所直後の時期に主体的に開始することにはかなりの困難が予想されるため、その効果を引き出すためには、刑務所入所時から適切な事前教育や導入的活動を段階的に実施し、活動開始のためのレディネスが形成されていることが前提となろう。

「ソーシャルサポート」では、サポートしてくれる人が少ないうえに、出所後さらに身近な直接的サポートが縮小化していることが明らかになった。社会生活においては、出所受刑者でなくとも多くの人が多様な問題を抱えて生活している。そのような中、逸脱行動や犯罪行為の抑制に多大に関与しているのがソーシャルサポートであると思われる。社会復帰のためには、初期の直接的ソーシャルサポートの確保が優先課題であることはいまでもないが、生活の安定度によって、段階的に生活の見守りなどの間接的ソーシャルサポートへとシフトしていくことが必要となろう。そのためには、専門的、非専門的ソーシャルサポートの確保と連携、それを組織的にマネジメントしていくことが不可欠になる。

心理的側面では、「自信が持てず」「生活にハリがない」状況で、生活の基盤である「収入」「住居」に対して不安を有している点が問題である。なお、「住居」については不満感も強く有している。「収入」の問題は、職業との関連

が大きいものであり、安定かつ継続した正規雇用の確保が最優先の課題となろう。また、「住居」の問題は本調査の対象者固有の問題と思われる。出所時に帰住先がないこと等を理由に更生保護施設の利用に至っているため、これから適切な生活の拠点を得ることができるかどうかは、当然大きな不安感として顕在化しており、住宅の斡旋と定住に向けたフォローアップが不可欠となる。不満感については、物理的居住環境に対するものか、集団生活での対人関係に対するものであるのか今回の調査結果からは不明であるが、更生保護施設を利用した社会内処遇において、居住環境は、刑務所、更生保護施設、地域へと段階的に変化していくものであり、その中間に位置する更生保護施設での望ましい居住環境については、今後さらなる検討の必要があると思われる。

「職業」については衛生要因、動機づけ要因の両方が満たされていないことにより、仕事への不満が発生しやすく、それが職場不適応を引き起こし、些細な原因で離職しやすい状況にあることが問題である。まずは、仕事への不満感をコントロールする要因である衛生要因が充足されることが重要である。生計の維持に必要な収入が安定して得られることはいうまでもないが、職場集団でのフォーマルグループ、インフォーマルグループの双方への適応をサポートし、職場で孤立しないための配慮が必要である。また、雇用の質を向上するには、職業適性と従事する仕事のマッチングが重要であり、これをもとに仕事のやりがいコントロールする動機づけ要因の充足をはかることも必要である。

このように複合的な生活問題を有する出所

受刑者に対する支援は、単発的な相談や助言にとどまることなく、適切なアセスメントに基づく個別的に計画化されたケースワークが必要であり、さらには個人の問題性に対応した、一律ではない支援期間が柔軟に設定されるべきである。特に、再犯防止の観点から、支援終了後のモニタリングとフォローアップを徹底すべきである。支援強化のためには、専門的マンパワーの確保と教育、福祉、労働など関連領域とのネットワークの強化は不可欠となろう。

本研究では、生活問題を有する出所受刑者の現状について、出所受刑者への聞き取り調査の結果から、並列的ではあるが支援課題をピックアップすることができた。しかし、出所を契機とした変化に関しては、厳密には縦断的検討が必要になる。さらには、再犯防止の視点から、生活問題のウエイトを踏まえた分析や個人の諸属性と生活問題との関連性、再犯と生活問題との関係などの検討も不可欠であると思われる。

#### 引用・参考文献

- 1) 安達智子「セールス職者の職務満足感-共分散構造分析を用いた因果モデルの検討」心理学研究 69(3) 223-228 (1998年)
- 2) 藤本哲也著「新時代の矯正と更生保護」現代人文社 (2013年)
- 3) 浜井浩一編「犯罪統計入門(第2版)」日本評論社 (2013年)
- 4) 法務省 犯罪対策閣僚会議「再犯防止に向けた総合対策」法務省ホームページ(2012年)
- 5) 法務省 矯正統計「結果の概要」2013年(度)年報 法務省ホームページ(2014年)
- 6) 法務省法務総合研究所 研究部報告42「再犯防止に関する総合的研究」法務省法務総合研究所 (2009年)
- 7) 法務省法務総合研究所「平成24年版犯罪白書」(2012年)

- 8) 小長井賀與「犯罪者の再統合とコミュニティ —司法福祉の視点から犯罪を考える—」成文堂(2013年)
- 9) 松本洋著「職務分析の理論と実際」125-135 社団法人雇用問題研究会(1973年)
- 10) 日本犯罪社会学会編集「犯罪からの社会復帰とソーシャルインクルージョン」現代人文社(2009年)
- 11) 日本犯罪社会学会編集「犯罪者の立ち直りと犯罪者処遇のパラダイムシフト」現代人文社(2011年)
- 12) 日本更生保護協会「更生保護特集更生保護施設」日本更生保護協会(2011年)

- 13) 岡村昌毅著「働く人の心理学」26-27 ナカニシヤ出版(2013年)
  - 14) 沢崎達夫「自己受容に関する研究(1) —新しい自己受容測定尺度の青年期における信頼性と妥当性の検討」カウンセリング研究, 26, 29-37(1993年)
  - 15) 社会福祉士養成講座編集委員会編「地域福祉の理論と方法」174-177 中央法規出版(2009年)
- ※本研究は、日本財団「再犯防止プロジェクト」の一環として実施した。

出所受刑者の生活問題と社会復帰支援の課題 英文抄録

## Life Problems and Support for Social Reintegration of Released Inmates

Hiroyuki Kirihara

(Professor, Department of Sociology, Komazawa University)

### Abstract

By conducting survey interviews with released inmates struggling with social reintegration, this study investigated eight categories of their life problems and discussed them from two perspectives: differences between released inmates and the general populace as well as individual internal changes following release from prison. The following were revealed as issues that particularly require support: isolation resulting from deterioration of personal relationships, reduction of social support, decreased economic activity, fewer opportunities to relieve stress, a strong sense of insecurity over income and dwelling, as well as conditions leading to an inability to adapt to the workplace or the loss of one's job.

To deal with these life problems, it is essential to have individually planned and flexible casework based on appropriate assessment and maintenance, guarantee and coordination of specialized or non-specialized social support, and occupational support aimed at securing employment and improving its quality.

**Keywords :** released inmates, life problems, support for social reintegration